

森のちやれんがニュース

2018 春

Newsletter vol.11



第10回企画テーマ展 『カムイとアイヌのものがたり』を開催

2018年2月2日(金)～4月8日(日)を会期に、第10回企画テーマ展『カムイとアイヌのものがたり』を開催しました。

アイヌ民族の伝統的な世界観では、カムイとアイヌ(人間)とが、お互いにさまざまな関わりあい影響を及ぼしあって暮らしており、それによって世界が成り立っていると考えられています。アイヌ民族が語り伝えてきた口承文芸には、このようなカムイとアイヌに関する物語がたくさんあります。

今回の企画テーマ展では、これらの物語のアニメやデジタル絵本を用い

て、カムイとアイヌの物語世界について、さらにはアイヌ民族の伝統的な世界観や信仰について、紹介しました。

写真は、アイヌ民族の歴史や文化を学びに来た高校生たちが、企画テーマ展を見学しているところです。映像が流れるスクリーンやモニターを前にじっくりと物語に耳を傾ける生徒や、アイヌの物語を紹介した絵本などの閲覧コーナーで読書に励む生徒の真剣なまなざしが印象的でした。見学を終えると、レクチャールームに戻り、今日学んだアイヌ文化について、活発な議論が行われました。



CONTENTS

- 2 資料紹介
森のちやれんがの権現様
- 4 研究活動紹介
<北海道らしさ>の秘密をより鮮明に
- 6 イベントレポート
北海道博物館の<古文書講座>
バックヤードツアーを開催しました
- 7 アイヌ民族文化研究センターだより
山田秀三先生の地名調査
- 8 活動ダイアリー

資料紹介

森のちゃれんがの権現様

学芸部長 舟山直治

当館の総合展示第3テーマにあるクローズアップ展示⑤では、4月7日（土）から7月13日（金）まで「岩手県から北海道へ渡った神楽」として神楽道具を展示する予定です。展示の主演は、1921（大正10）年に奉納された天照皇大神銘入りの幕と権現様（収蔵番号165,428、写真1）です。権現様といってもあまり聞き慣れない言葉ですが、東北地方では獅子頭や獅子舞のことを権現、権現様、権現舞と呼称します。特にユネスコの無形文化遺産登録となった岩手県の岳や大償などの早池峰神楽では、最後の演目が権現舞となります。霊力のある獅子を神格化した獅子頭と同様に、権現様は神の化身として、悪魔退散や無病息災にご利益があると伝えられています。

クローズアップ展示⑤では、権現様

のほかに、1889（明治22）年に神宮教岩手本部が発行した「神楽講社」の札（収蔵番号165,445～165,451、写真2）、1914（大正3）年に写筆された神楽台本の「神楽聲聞記」（収蔵番号165,444、写真3）、年代不詳の神楽面（収蔵番号165,429～165,443）などを展示したいと考えています。

これらの神楽道具は、いまから100年ほど前に、岩手県の外川目村（現在の花巻市大迫町）合石地区から北海道のニセコ町や厚沢部町へ移り住んできた人びとが、狩太神社（ニセコ町）のお祭りで舞っていた頃に使っていたものです。残念ながら1945（昭和20）年頃には神楽の伝承が途絶えてしまい、北海道開拓記念館が2012（平成24）年に神楽道具を収集するまで、厚沢部町在住の神楽伝承者の末裔にあたるお宅

で祀られていました（写真4）。

この神楽の活動の詳細は不明ですが、先の「神楽聲聞記」によれば、神楽禰宜仲間12人が、先祓1人、猿田彦1人、四楽担当4人、権現2人、太鼓1人、手拍子2人、法螺笛1人の役割を分担しています。これは先祓いを先頭に猿田彦と権現様の行列を組んで、門付けなど廻り神楽をしていた証になります。また、神楽祭の入用物として、餅又は菓子に、米3合、銭3銭、水1升、紙20枚といった書き込みもあることから、祭祀では、まず供物を供えて神楽を奉納していたのでしょう。

神楽の演目は、「神楽聲聞記」によると、神楽が48幕、狂言が24幕と極めて豊富であり、地域の状況にあわせて神楽を奉納することが可能であったと推察されます。実際に、現在の岩見沢



写真1 1921（大正10）年の奉納幕と権現様

市、札幌市、小樽市、余市町、岩内町、共和町小沢、倶知安町、黒松内町、寿都町、長万部町、室蘭市、苫小牧市といった地名の書き込みがあることから、神楽彌宜仲間の集団は、狩太神社祭礼だけではなく、空知、石狩、後志、胆振など広い範囲で活動していたようです。

ところが「神楽聲聞記」の奥付(写真5)には、「天明季中始 明治二十二年免状下付講社 大正三年二月四日節

分始メ 神楽彌宜仲間拾貳名 狩太村社神楽 聲聞記」とあり、この神楽は天明年間(1781～1789)に創始した神楽で、後に神宮教岩手本部から下付された1889(明治22)年の「神楽講社」の札を典拠として、1914(大正3)年の節分から狩太神社で奉納されたことが理解できます。したがって、狩太神社神楽は、北海道における神楽の奉奏や廻り神楽を実施するにあたって、神宮教岩手本部が発行した神楽講社の札を

頼りに活動していたことになります。

このようにすでに伝承が途絶えた神楽であっても、関連する道具などが残ることで、かつての様子を知ることが可能となります。特に、この神楽道具は、18世紀末の岩手県神楽の伝承と、20世紀の北海道における神楽の伝承の一端を明らかにするための手がかりとなる貴重な資料であるといえます。



写真2 神宮教岩手本部発行の神楽講社札(表)



写真4 権現様の祭壇

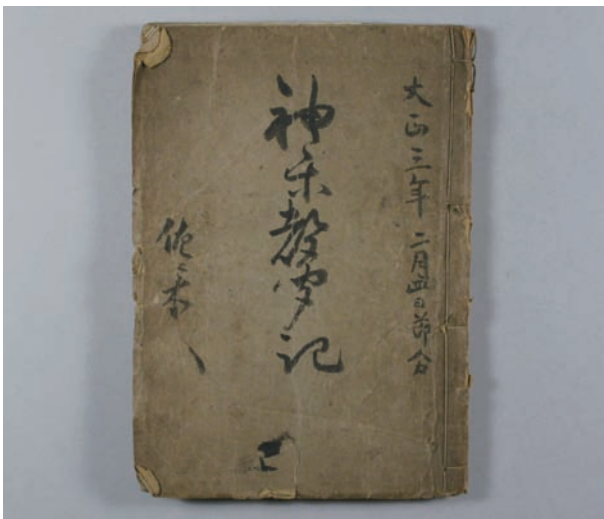


写真3 「神楽聲聞記」(表紙)

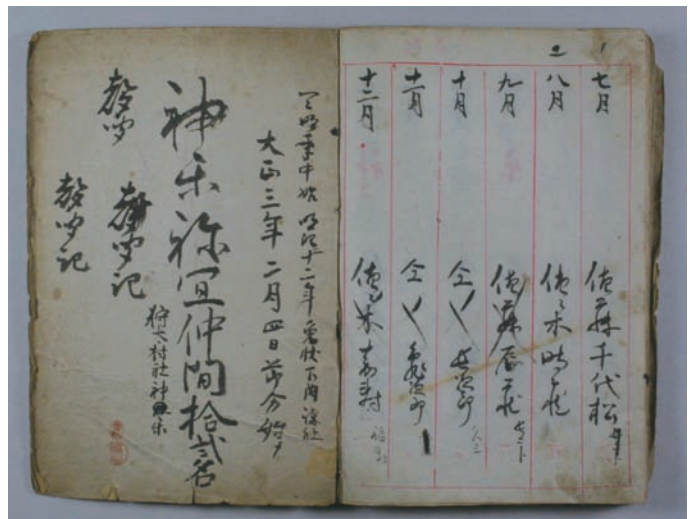


写真5 「神楽聲聞記」(奥付)

研究活動紹介

<北海道らしさ>の秘密をより鮮明に

池田 貴夫



学芸主幹 池田貴夫

1970年、埼玉県熊谷市生まれ。
1997年より北海道開拓記念館
(現北海道博物館) 学芸員。専
門は民俗学。博士(学術)。写
真は、かつて北海道の家庭に
あった「糞突き棒」の形態を
観察しているところ。

博物館と研究

私は、北海道博物館総合展示室第3テーマ「北海道らしさの秘密」の担当として、その展示制作にたずさわってきました。第3テーマは、北海道独特の景観、海や大地の資源を活かし育んできた数々のモノづくり、多雪寒冷な気候に適応しようと模索した生活スタイルなど、さまざまな<北海道らしさ>が生成されてきた過程や背景を、産業やくらしの歩みをたどりながら振り返るというコーナーです。

ただし、展示の中にも、まだまだ明らかになっていないモノやコトがたくさんあります。それらを根気よく突き詰めて明らかにしていく作業(研究)を継続的に進めていくことにより、利用者の皆さまにより詳しい説明を提供できるようになります。

例えば、第3テーマの最後には「玉置神社奉祀之景」と書かれた明治時代の絵馬(複製: 実物は新十津川町開拓記念館所蔵)が展示されています。10年ほど前、この絵馬について抱いた疑

問に対し、私はさまざまな史料を調べ、また北海道新十津川町や奈良県十津川村などで現地調査を行ってきました。その結果、この絵馬の描かれ方や、開拓地での神社創建をめぐるいくつかのエピソードについて、より詳しい説明が可能となりました。その情報は、私がこの博物館を去っても、博物館の知の蓄積として引き継がれていきます。

板かるた、ロウソクもらい、観楓会

前段が長くなりましたが、第3テーマには「四季とともに」のコーナーが設けられています。本州より南から移住してきた人びとは、北海道の季節にあわせてくらし方や行事などを新たにつくりだしてきました。それらを物語るモノや写真、絵などを紹介しています。この展示をより深く説明できるよう、私は現在、主に近代以降の北海道から日本領期の樺太にかけて、広域のかつ特徴的に広がった季節行事についての民俗学的研究に力を入れています。

例えば、北海道の冬の百人一首は「板かるた」あるいは「下の句かるた」とも呼ばれ、取り札はホオノキの板で製作されたものを使い、また下の句のみを詠むという特徴が見られます。これらの特徴は元々会津地方の百人一首でみられたことから、会津からの移住者が持ち込んだものと考えられています。そして、明治時代のいつからか、新しい様式を生成しつつ、北海道全域さらには日本領期の樺太まで拡がりました。概ね、ここまでは説明できます。

ところが、「板かるた」の生産者や流通を促した人びとについてのデータを収集しきれていないため、どのようにしてこれだけ広域的にかつスピード感をもって広がったのか、説明しきれないでいます。今後は、この点についての情報集めに力を入れていきたいと考えています。

また、北海道内に残存する古い「板かるた」には、会津訛りや、東北地方の訛りのものが確認できます。実物資料の形態と書かれている訛りを比較分析することにより、板かるたの拡がり具合を推し量ることもできるかもしれません。こういった作業にも取りかかりたいと考えています。



取り札が木製の百人一首



「玉置神社奉祀之景」絵馬(複製)



第3テーマの「四季とともに」のコーナー

拡がり方に類似性がみられる季節行事は、ほかにもあります。北海道では七夕の日に、子供たちが唄や囃子を伴いながらロウソクをもらって歩く子供行列が見られ、「ロウソクもらい」などと呼ばれてきました。これらは青森県などにかつてあった風習が、函館周

辺に伝わったものと考えられています
が、必ずしもその時期やその後の拡が
り方の詳細は明らかにはなっていま
せん。また、確かに北海道の夏の風物詩
となりましたが、北海道東部（特に、
十勝地方、根室地方など）には、あ
まり拡がらなかったようです。



かつてのロウソクもらいの風景



ロウソクもらいの行灯

また、地域や職場などで行われる秋
の慰安旅行は、北海道では「観楓会」
と呼ばれ、明治時代中期頃にはすで
に北海道に拡がり、日本領期の樺太
でも行われました。でも、なぜ「観楓
会」なのでしょう。「観楓」という言
葉は、本州などでも一般的になじみ
深い言葉ではなさそうに感じます。



樺太での観楓会
『樺太日日新聞』1933年9月21日より

板かるた、ロウソクもらい、観楓会
の例をあげましたが、これらはかなり
のスピード感をもって、北海道さら
には日本領期の樺太という広範な地
域に拡がっていったようです。どの
ような力が働き、どのようにして人
びとが受け入れていったのでしょうか。

節分と落花生

これは比較的新しい時代の事例で
すが、現在、北海道、東北地方、新
潟地方、九州南部などにおいて、節
分に大豆ではなく落花生を撒く風習
が色濃く分布しています。その始ま
りは、北海道は新潟地方などとも
に最も早く、北海道では昭和20年
代後半から昭和30年代頃にかけて
、極めて短期間で拡がっていった
ものと考えられます。しかしながら
、なぜ、そうなっていったのか、よ
くわかりません。古老から聞けばわ
かるかと思いましたが、はっきりと
「いつから」「こうだったから」と
答えられる人は、実はほぼいません
。この移り変わりを克明に日記など
に書き留めた方にも出会ったことは
ありません。そして、北海道や新
潟地方で拡がった節分の落花生撒
きは、その後東北地方へと波及して
いきます。北海道と九州南部の関
係はわかりません。昭和20年代後
半以降、生産業者、加工業者、流
通業者、小売業者、そしてそれら
を購入して豆を撒く側で、いった
いどのような力関係が働いていた
のでしょうか。



鬼のお面付の落花生



かつて大豆を使って行われた「豆占い」

民俗の生成・移動・波及の力学

このように、北海道には、本州以
南の一部にしかなく、かつその後衰
退していく民俗を拾い上げ、北海
道ならではの新しい様式と地域差
を生み出しつつ北海道全域に波及
させた事例や、新しい民俗形態を
いち早く波及させた事例など、か
つて北海道で繰り返された民俗再
編のうねりが、現在に続く季節
行事のなかに感じられます。

私は、＜北海道らしさ＞の秘密を
より鮮明に描くためには、このよ
うな民俗事例に注目し、それらを
生成に導いた創造力、広域的かつ
迅速に波及させた推進力、多くの
北海道民が受け入れるに至った
判断力など、多様な力のベクトル
を明らかにしていかなければなら
ないと考えています。言わば、民
俗の生成・移動・波及に関する力
学的視点からの研究です。そのた
めにも、日本列島をこまめに歩
く形で、研究の進展につながる情
報集積に努めています。

イベントレポート

北海道博物館の＜古文書講座＞

2018年1月7日(日)から3月18日(日)にかけ、計6回にわたり、「はじめての古文書講座」を開催しました。講師は当館でここ10数年古文書講座を継続して実施してきた東俊佑が担当しました。

前半の3回は、「入門編」と題し、「古文書が全く読めない!」という方にオススメの講座としました。助詞や変体かなの見分け方、候文の言い回しなど、くずし字を読むうえで最も基本的な事項について、用例や練習問題を解きながら、基礎からじっくり学びました。

後半の3回は、「入門編」の続編で、用例や練習問題を解きながら、くずし字により慣れていく講座としました。特に、〈へん〉や〈つくり〉の部分はどのようにくずれるのか、この文字はこんなふうにくずれる、といった、筆のはこび方にも注目し、〈わかる文字〉

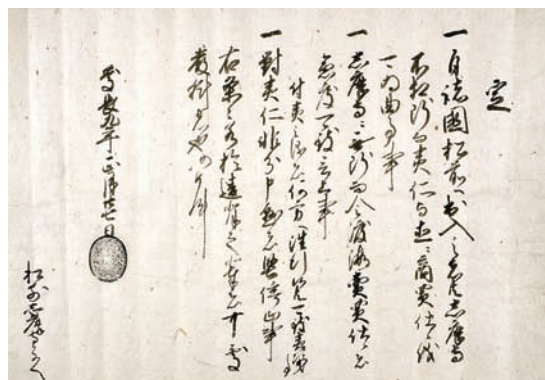
を増やしていくことを目指しました。

ちなみに、今年度「入門編」の卒業問題は、当館の総合展示室で展示している、徳川家康が松前慶広に与えた黒印状の基礎的な文字を翻刻することでした。

この講座に6回参加すれば古文書が読めるようになるというものではありませんが、このような講座などをきっかけに、古文書と毎日触れ合うことにより、徐々に読めるようになっていくことを実感いただければ幸いです。



「はじめての古文書講座」のようす



徳川家康黒印状

バックヤードツアーを開催しました

2017年12月23日(土・祝)および2018年1月8日(月・祝)の2日間、「博物館のバックヤードを見よう」を開催しました。これは、利用者の方がたに、博物館活動そのものに対する理解を深めていただくための事業の一環として、実施しました。講師は、当館で文化財保存科学を研究する杉山智昭、ならびに、現在、資料管理を管轄している山際秀紀が担当しました。両日とも午前と午後の2回、併せて4回のツアーを行ないました。

まずは、レクチャールームにおいて、文化財保存の重要性、収蔵庫の役割、モノが劣化する原因、北海道博物館が日常的に行っている資料の保存・管理対策などについて、お話ししました。そして、ツアーへと出発しました。

普段、資料などを運ぶ大型エレベーターで地下へ。収集した資料に保存対

策を施す「保存処理室」や、資料の受入・整理作業を行う「資料受入整理室」などを巡り、それぞれどのような機材や資材が使われているのかを見学しました。

そして、いよいよ収蔵庫です。収蔵庫の温湿度・安全管理などの観点から、1回につき10名までというツアーでしたが、収蔵庫に保管されている多様な収蔵品とその管理に、参加者のみなさまも圧倒されているようでした。

(この頁、
学芸主幹 池田貴夫)



事前レクチャーのようす



大型資料を収蔵する第2収蔵庫にて

アイヌ民族文化研究センターだより

山田秀三先生の地名調査

佐々木 利 和

昨年、このニュースレター（第7号）で、アイヌ文学研究者・久保寺逸彦先生のことを紹介させていただきました。

私にアイヌ文化研究の最初の手ほどきをして下さった久保寺先生は、1971（昭和46）年、69歳の若さで病のため亡くなりました。私はそのとき23歳、まだ勉強を始めたばかりの、文字通り駆け出しでした。そんな私に、久保寺先生が、「私にもしものことがあったら、アイヌ文化の勉強は山田さんのところに行きなさい」とご紹介いただいたのが、山田秀三先生でした。

山田先生は、既に『東北と北海道のアイヌ語地名考』（1957年）をはじめ、アイヌ語地名に関する著作をいくつも発表していらっしゃいました。けれども、未だ山田先生のことをよく存じ上げていなかった私は、「地名研究では大家だけれど、アイヌ文化は……」と、最初は半信半疑で足を運んだのです。

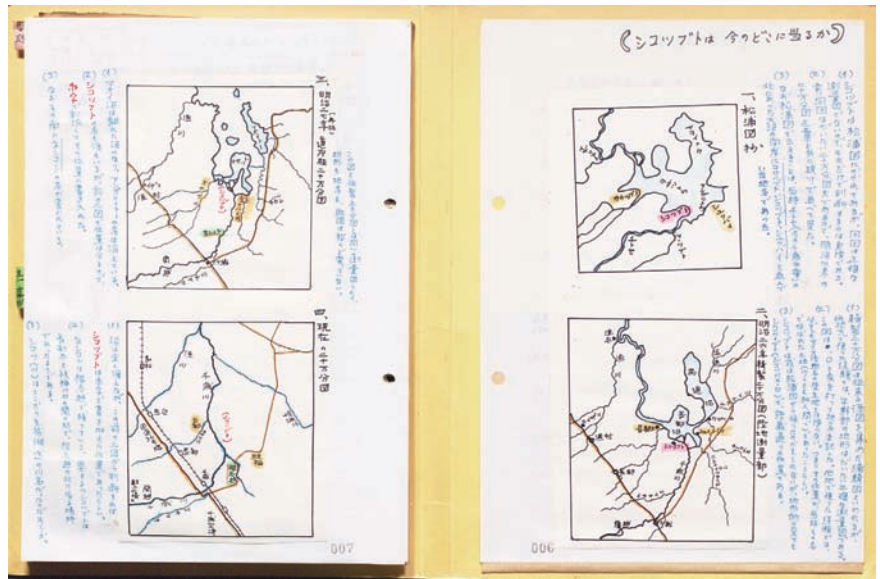
* * * * *

すぐにそれは大きな間違いだとわかりました。山田先生は、アイヌ語・アイヌ文化そのものにもたいへん造詣が深く、若い世代には特にいろいろと目をかけてくださる懐の広い方でもありました。山田先生のもとで学べたことが、私のアイヌ文化の勉強にとって大きな支えの一つになったのです。

山田先生の地名調査にも、幾度か同行させていただく機会に恵まれました。



山田先生（左）と私（右）
千歳市長都での地名調査にて 1987年



千歳での地名調査の資料の一 1987年

た。ご一緒してみて、山田先生のご研究がいかにもすぐれたものであるかを、改めて肌身で感じました。

とにかく事前の準備が徹底している。さまざまな古地図や文献を丹念に調べてから現地に行らっしゃるので、当日は、もう地形のおおよそは頭に入っている。タクシーの運転手さんに「あそこを曲がると右に崖があるはずだから……」とかおっしゃって、運転手さんのほうが「なんで知っているんだ」とびっくりしていた、なんていうことがよくありました。

夕方、ホテルに着くと、「じゃあ、佐々木君、今日の復習やりましょう」。夕食後、先生のお部屋で、地図を広げてその日の現地調査の確認が始まります。私なんぞ、もう眠くてボーッとばかりかけているのに、先生は煙草片手に、熱心に、しかも愉しげに話し続けていらっしゃる姿を、今もよく思い出します。

* * * * *

1992（平成4）年に山田先生が亡くなられた後、遺された膨大な資料は、「北海道の財産に、アイヌ文化のために」

という先生のご遺志にもとづき、ご遺族ともよく相談させていただいて、1994年に道立アイヌ民族文化研究センターに寄贈されました。この「山田秀三文庫」は、今は北海道博物館の大事な資料の一つになっています。

山田先生による地名調査の記録は、たいへんわかりやすく、読みやすい。こんな言い方は不遜かもしれませんが、楽しく読める。そして、読み進むほどに山田先生のご研究に引き込まれるのです。

これまで、各地で山田秀三文庫の資料展が開催されていますが、これからも、北海道の大切な財産として資料の整理を続けていただくとともに、多くの方々に山田地名学の魅力とアイヌ語地名の世界を伝える展示会を開いてほしいと思っています。

非常勤研究職員 佐々木利和

1948年、北海道陸別生まれ。

東京国立博物館、文化庁、国立民族学博物館を経て、2009年より北海道大学アイヌ・先住民研究センター。現在は同客員教授。専門は近世史、アイヌ文化史。博士（文学）。

活動ダイアリー

2018年1月～3月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

1月6日(土)

■はっけんイベント
「手織りの『ふかふかミニポーチ』をつくろう」が開幕。
(～1月28日の土日祝)



1月7日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座①入門編」第1回を開催。担当：東俊佑。

1月8日(月・祝)

■特別イベント「博物館のバックヤードを見てみよう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀。

1月13日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「いのりのしるし？ 絵馬づくりチャレンジ」を開催。担当：三浦泰之・水島未記。

1月14日(日)

■ミュージアムカレッジ「1882年4月、襟裳岬近くで難破した英国船」を開催。担当：山田伸一。

1月21日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座①入門編」第2回を開催。担当：東俊佑。

1月28日(日)

■ちゃれんがワークショップ「太古の絶滅生物・アンモナイトの復元」を開催。担当：栗原憲一・圓谷昂史。

2月2日(金)

■第10回企画テーマ展「カムイとアイヌのものがたり」が開幕。
(～4月8日(日))



2月3日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～②を展示入替。(～4月6日(金))



①「ヨイチ場所請負人林家の古文書」



②「生誕200年 旅の巨人・松浦武四郎」

■はっけんイベント

「自然素材で染めた羊毛でつくってみよう」が開幕。

(～2月25日の土日祝振)



2月4日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座①入門編」第3回を開催。担当：東俊佑。

2月10日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「雪のなかで宝さがし」を開催。担当：舟山直治・池田貴夫。



2月14日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：遠藤志保・村上孝一。

2月17日(土)

■「青少年のための科学の祭典 in 北海道2017」に出展。

2月18日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座②続編」第1回を開催。担当：東俊佑。

■「青少年のための科学の祭典札幌冬の大会」に出展

2月24日(土)

■自然観察会「雪の森で足跡を探そう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表溪太・濱本真琴・扇谷真知子(自然ふれあい交流館)。

■アイヌ語講座「見てみよう！カムイとアイヌの物語①」を開催。担当：遠藤志保。

2月25日(日)

■ミュージアムカレッジ「野幌周辺の動植物を探索～化石から現在まで～」を開催。担当：水島未記・添田雄二・表溪太・圓谷昂史。



2月27日(火)

■平成29年度北海道博物館内部評価委員会を開催。

2月28日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：小林孝二・青柳かつら。

3月3日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「アイヌ語であそぼう！」を開催。担当：田村雅史・大谷洋一。

■はっけんイベント

「かわいい、かわいい小さなかごをつくってみよう！」が開幕。
(～4月1日の土日祝)



3月4日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座②続編」第2回を開催。担当：東俊佑。

3月10日(土)

■アイヌ語講座「見てみよう！カムイとアイヌの物語②」を開催。講師：安田千夏氏・矢崎春菜氏(アイヌ民族博物館)。

3月11日(日)

■「野幌森林公園クマゲラー斉調査2018」を共催。

3月17日(土)

■特別イベント「くものがたり」を聞く～川上さやかさん口演会」を開催。講師：川上さやか氏(伝承者(担い手)育成事業研修生)。

■講演会「アイヌの物語世界」を開催。講師：中川裕氏(千葉大学文学部教授)。

3月18日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座②続編」第3回を開催。担当：東俊佑。

3月24日(土)

■アイヌ語講座「見てみよう！カムイとアイヌの物語③」を開催。担当：大谷洋一。

3月25日(日)

■ミュージアムカレッジ「アイヌ音楽を知らない人のための アイヌ音楽入門講座」を開催。担当：甲地利恵。

3月27日(火)

■平成29年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催。

3月28日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：圓谷昂史・三浦泰之。

来館者数

○2017年12月～2018年2月

総合展示室 6,829人 特別展示室 4,564人 はっけん広場 1,782人

○累計(2015年4月～2018年2月)

総合展示室 334,349人 特別展示室 232,867人 はっけん広場 81,248人

森のちゃれんがニュース 第11号

発行日：2018年3月28日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2018